

英語学習者の学習環境と情意要因の関係性

折小野 莉 奈

1. はじめに

近年、グローバル化が進んでおり、英語教育に対する関心も高まっている。それに伴い日本の英語教育も変わりつつある。外国語教育の充実を図るべく、文部科学省は平成20年3月に学習指導要領を改訂し、平成23年4月より小学校5、6年生において、聞くこと話すことを中心とした週1時間の「外国語活動」を必修化した。また中学校では、聞く・話す・読む・書くという4技能を総合的に充実させることとし、語数の増加や題材の充実を図ることとした。2020年の東京オリンピック、パラリンピックを迎えるにあたり、訪日外国人はさらに増加し、外国人とコミュニケーションをとる機会はますます増加すると考えられる。またビジネス面においては、外務省より日系企業の海外進出総数は平成28年10月1日時点で、7万1820拠点とし過去最多を記録している。日本の人口減少に伴い、日系企業の海外進出はさらに見込まれると考える。つまり、英語の必要性はさらに重要視されると予想できる。学校での英語の授業において、中学校では、授業時間数を10%程度増加、さらに語彙数を900語程度から1200語程度まで増やすこととし、小学校では、外国語活動を導入することで英語力を高めようとしている。しかし、現状日本の学生は、学校の授業以外で英語を使う機会が多いとは言えない環境にある。学校の授業を中心とした学校環境だけで、学習者の英語への意欲や関心を高めることは困難ではないだろうか。英語を学習していく中で、学習者を取り巻く環境は様々あると考えられるが、学習者の学習環境に注目することで、より効果的に学習者の英語に対する意識を変えられると考える。

本研究では、英語学習者の学習環境と情意要因の関係性について見ていく。特に、学習環境を家庭環境、学校環境、人間環境に分け、その場にあった適切な環境作りを明らかにすることで、学習者の英語学習に対する、意識や質を高められるのではないかと考える。

2. 先行研究の概要

2.1. 学習環境

本研究では、英語学習における重要な学習環境として家庭環境、学校環境、人間環境の3つに分けてみていくこととする。この3つの環境に絞った理由として、学習者が英語を学習していく中で、重要な他者として考えられたのが、家族、学校の先生、そして友人であると考えたためである。

まず、学習環境の中でも、家庭環境に注目した鷺見(2014)は、「外国語を学ぶ意味や意欲には、家族の興味・関心の影響が認められ、決して無視できない要因であることが確認された。」(p.9)と述べていることから、家族の学習者への興味・関心が学習に影響していることが分かる。しかし、その一方で、鷺見(2014)は、「家族ができるということが学習の負担になっていると考えられる。」(p.6)としており、家族に英語ができる人がいることは学習者にとってプレッシャーとなる可能性を示唆している。また、Pomerantz(2012)は、親子関係と学習動機の関係について、親が小学生の子供の学校行事に積極的に関わることは、動機づけに良い影響を与えるとしている。このことから、家庭環境が学習意欲へ影響を与えていることに加えて、若い学習者の方が影響を受けやすいようである。

次に、学校環境において、新井(1995)は、「学級の雰囲気は、子どもの自尊感情や学業成績と強く関わり、単に学校の居心地の善し悪しを決めるだけの問題ではないのである。」(p.132)と述べている。学級の雰囲気は、学校環境さらには人間環境に関係していると考えられ、学習成績に影響を与えることも明らかとなった。さらに、新井(1995)は、学校環境における授業形態について「最も問題なのは、教師主導の授業では、子どもの学習の自主性、主体性を育てることが困難であるということであろう。これでは将来の生涯学習者を育てることは難しくなる。」(p.11)と主張しており、学校環境における授業の課題を指摘している。生徒の自主性や主体性を高めるような授業こそ、学習の動機づけが高まるのではないだろうか。生涯学習者を育てていく手立てとして新井(1995)は、「子ども1人ひとりの興味・関心や楽しみ、喜びあるいは不安や心配、学習や能力についての自己認知や自己概念、さらには勉強に対する家庭のプレッシャーなど、一言で言い表すならば、1人ひとりの子どもの動機づけの特徴を個別的に理解しなければならない。」(p.13)と主張している。教室の子どもをまとめて見るのではなく、1人ひとりにあった対応、指導が必要だと分かる。また、学習者も自分を理解してもらうためには、授業において積極的に学ぶ姿勢、そして自分自身の興味を発見できるよう、能

動的に学ぶ意識が必要だと考える。

最後に臼井 (2014) は、友人観に対する信念の影響として、「自分とは違うタイプの友だちと積極的にかかわるべきと考えたり、友だちの間のトラブルであってもそれは自分を成長させるチャンスととらえるような見方は中学生の高学年で目立って増加している。」(p.79) と述べており、学年が上がることで、友人の影響をより受けやすくなっていると考えられる。また、渡邊・堤 (2017) は、大学新生を対象に友人関係を形成・維持する行動と適応間との関連で、「良好な友人関係が形成されていることが、大学での不安や孤独感、抑うつ感を軽減させ、学習意欲や勤勉さを向上させ、自尊感情を向上させると考えられる。」(p.118) と主張しており、友人関係が、学習意欲に関係していることを強調している。

上記の先行研究の結果を踏まえ、本研究では、英語学習における学習環境と情意要因の関係についてみていく。学習環境については、家庭環境と学校環境、そして人間環境に分けてみていくが、3つの環境を同時に見ている研究をみることができなかつたため、どの環境が情意要因に最も影響を与えているのかも調査していきたい。また環境ごとの特徴を調査し、より良い環境づくりを提案していきたいと考える。

2.2. 情意要因

まず喜田 (2008) は、「英語の学力を高めるには学生自身の英語学習に対する適切な意識—動機づけ—が欠かせない。」(p.65) と述べている。また、王 (2013) は、「一般に、第二言語の習得に成功するかどうかは、学習者の知性や言語適性、年齢、学習環境、学習方法などによると考えられている。しかし、学習者の心理状態もそれと同じくらい、あるいはそれ以上に重要であるといえよう。」(p.23) と主張している。これらの研究では、動機づけや心理状態を情意要因と考え、例えば、動機づけの高い英語学習者は、英語能力も高まるであろうとしている。さらに、学習環境と同じくらい、またはそれ以上に情意要因は英語学習において重要だと述べている。また、新井 (1995) は「子どもの学習を効果的に進めるためには、目標をどのように設定するかが重要である。」(p.136) としており、さらに、喜田 (2008) は英語学力と動機についての相関を研究し、「英語学習で積極的な多目的を持って学習しているグループは消極的単一目的のグループと比較して学力が有意に高い。」(p.79) と述べており、その中で、積極的な目的として英語資格試験や短期語学研修などが有効であるとしている。このように、英語学習の目的や目標を明確にすることは重要だと言えそうである。しかし、吉村・中山 (2010) は、「参加

者が海外研修から帰国した後、研修期間中に伸びた英語力をどのようにして持続させていくのか、あるいはどのようにしてレベルアップしていくのかを考える必要がある。」

(p.51)と述べており、海外研修にて得た英語力を維持していくプログラムの重要性も訴えていることが分かる。英語学習に目的を持ち、動機が高い学習者ほど能力が高いことが明らかにされている。留学等を英語学習の目的や目標とすることは、英語学力や動機を高めることに効果的であるが、その後の目的や目標を維持させることが課題ということが分かった。

また、外国語学習における不安に関して八島(2003)は、「不自由な第二言語を使うことと、周囲の評価を意識することで学習者の不安は引き起こされる。不十分な自己呈示の結果、自己概念が傷つけられ、さらなる失敗を予測し不安が増幅される。」(p.84)と主張しており、英語学習において不安はつきものであると考えられる。さらに、八島(2003)は、「不安や積極的に発言する傾向は、個人の性格が基盤になり、比較的变化しにくい側面もあるが、それと同時に、学校や家庭など個人が置かれた環境の中で環境との相互作用を通して変化する側面もある。」(p.85)と述べている。不安は変化しにくいと捉えられるが、学習環境との関係が強いため、学習環境を通して変化することもあるとしている。

本研究では、英語学習における意識が高い人の共通点を見ていき、どのような環境から影響を受けているのか、また、情意要因が現在の英語学習にどのような影響を与えているのかを調査していきたい。

3. 研究課題

本研究は、現在の英語学習に対する意識が、どのような環境から影響しているのかということをも明らかにするため主に以下の4つを研究課題として取り上げることとする。

1. 英語学習において情意要因との関係が最も強い環境は何か
2. 英語学習における家庭環境と情意要因の関係はどのようなものか
3. 英語学習における学校環境と情意要因の関係はどのようなものか
4. 英語学習における人間環境と情意要因の関係はどのようなものか

4. 調査の概要

4.1. 調査対象

東京女子大学の1年生から4年生の計84人にアンケートを実施した。基本的には、ラ

ンダムに収集しているが、英語学習意識が高いと思われるキャリア・イングリッシュ課程ⁱ生にはあらかじめアンケート協力を依頼し実施した。また、本研究では、現在の学年や専攻は分類をしないで分析することとした。

4.2. 調査方法

本研究では、東京女子大学の学生にアンケート用紙を配布して、2017年6月下旬から9月中旬にかけてアンケート調査を行った。このアンケートは鷺見（2014）のアンケートを抜粋、微修正し、新たに項目を加えつつ、現在の英語に対する意識の項目、学習環境の項目を作成し実施した。またこのアンケートは無記名回答とした。

質問項目ⁱⁱは、問1から問7を回答者の基本情報、問8を現在の英語に対する意識、問9を英語学習に最も影響を与えた時期、問10から問12を英語学習環境、問13から問15を情意要因に関する項目とした。英語学習環境については、3つの環境に分けており、家庭環境、学校環境、そして人間環境（友人・先輩・後輩など同世代の人）とした。現在の英語に対する意識についての項目と、英語学習環境についての項目は、4段階尺度形式（1. 当てはまらない、2. 少し当てはまらない、3. 少し当てはまる、4. 当てはまる）の回答方法を用いた。4段階尺度形式以外の回答の一部には自由記述欄を用い、回答理由を記入してもらうことで、回答理由を細かく見ることとした。さらに、4種類の情意として統合的動機、道具的動機、自信、そして意欲を表す質問を作成し、現在の英語に対する意識の質問を調査した（表1）。

表1 情意項目

現在の英語に対する意識	情意
1. 英語が好きだ	統合的動機
2. 外国の文化や習慣に興味・関心がある	統合的動機
3. 私にとって英語を勉強することは必要だ	道具的動機
4. 英語はできる方だ	自信
5. 留学の経験がある／予定がある／してみたい	意欲
6. 将来、英語を使う仕事をしたい／する予定だ	道具的動機
7. 将来、私は今よりも英語で話す機会が増えると思う	意欲
8. 外国人の質問に答えられる（例：道案内）	自信

4.3. 分析方法

回答者84人分、全てを集計し質問項目の検討を行った。キャリア・イングリッシュ課程生や留学経験者など、英語学習に対して意識が高いと思われる回答者とその他の学生の比較も行った。研究課題に沿って、家庭環境、学校環境、そして人間環境の3つの学習環境が、現在の英語に対する意識にそれぞれどのように影響しているのかを調査し、またその関係の強さについて調べるため、統計ソフト IBM SPSS Statistics 23で統計処理を行った。

5. 結果及び考察

5.1. 基本情報

回答者の基本情報として問1から問7で質問をした。

5.1.1. 留学経験

問1と問2では、留学経験について聞いた。問1より留学経験者は26% (22人) であることが分かった (図1)。問2では、問1で「はい」と回答した人のみに、留学先と期間を聞いており、留学先として多かった上位3か国は、アメリカが32% (7人)、オーストラリアが27% (6人)、ニュージーランドが23% (5人) であった。また期間としては3か月未満が全体の86%を占める結果となった。3か月未満の留学者の留学理由に多くあったものが、高校の語学研修プログラムである。海外短期英語研修プログラムに関して、吉村・中山 (2010) は「自分の意見や考えを直ちに整理し、それを「英語の論理」で表現する学習は、毎日英語を使用するような環境において実践すれば、短期間であっても大きな成果を上げることができることが証明されたことになる。」(p.50) と主張しており、海外短期英語研修は最適な学習環境として提供できるとしている。つまり、期間は短くとも、英語能力が向上する可能性はあるようである。そのため、本研究の留学経験者も、英語能力が高い可能性があると考えられる。さらに、英語能力を高めるための努力もあると考えられ、英語に対する意識も高いのではないだろうか。また、今回のアンケート調査では、留学の最長期間は5年であった。その留学理由は「父の転勤のため。」と書いてあり、自分の意思を持って留学に臨んだのではないようであるが、彼女は2017年6月現在、英語をさらに上達し

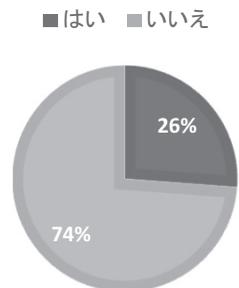


図1 留学経験の有無

たいという理由でキャリア・イングリッシュ課程を履修していることが分かった。留学経験から、英語学習の動機づけが上がったと考えられるケースであった。

5.1.2. キャリア・イングリッシュ課程

問3から問5はキャリア・イングリッシュ課程に関する質問である。キャリア・イングリッシュ課程の履修者は、大学の必修科目に英語が含まれているのにも関わらず、さらに学ぼうとしている点から、現在の英語に対する意識が高いと考えている。問3は、キャリア・イングリッシュ課程の履修の有無を聞いており、本研究では全体の32%（27人）がキャリア・イングリッシュ課程生であった（図2）。問4では、履修者のみの質問として、履修を決断した理由を問う項目を作成した。複数回答を可能にしており、最も多かった回答は「d. 将来、英語を使って仕事をしたいと思うから」であった。キャリア・イングリッシュ

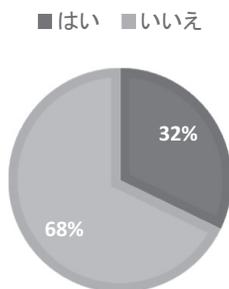


図2 キャリア・イングリッシュ課程

課程生の78%（21人）がこれを選択しており、将来を見据えて英語学習をしていると考えられる結果である。問5では問3で「いいえ」と回答した人のみに履修をしていない理由について聞いている。回答として多かったものは、「a. 英語が苦手だから」の15%（8人）や「b. 学校の英語の授業だけで、英語学習は十分だと思ったから」の17%（9人）という英語学習に対する消極的な意見に加えて、9%（5人）が時間的余裕のなさに関する意見を回答していた。しかし、履修者の中の15%（4人）が「f. 英語が苦手で克服しようと思ったから」と回答していた。このような結果から、本研究ではキャリア・イングリッシュ課程生の方が、履修をしていない学生に比べて、英語学習意識は高いと結論づけた。

5.1.3. 回答者の家族

問6と問7は回答者の家族について聞いている。問6は、家族の中で英語が話せる人、または外国文化に詳しい人がいるかを聞いており、「はい」と回答した人は35%（29人）であった（図3）。留学経験者の多くは、安全面や費用面に関してサポートしてくれる家族の理解と協力が必要不可欠なため、家族から影響を受けているのではないかと考えていた。そのため、ここでさらに問6と留学経験の有無の関係を確かめることとした。問1で留学経験者と回答した22人中、問6で家族の中で英語が話せる人、または外国文化

に詳しい人がいると回答した人は、55%（12人）であり、予想していたよりも少なかった。また、問7は問6で「はい」と回答した人のみの質問としており、問7-①と問7-②で分けている。問7-①では、その家族と対象者の関係、また問7-②では、その家族がしていたことは何かという質問とした。問7の回答者の中でも、特に留学経験者の家族に注目し、「a.留学」、または「b.海外に住んでいる/いた」と回答したのは12人中9人の75%であった。家族に留学等の経験者がいることは、その家族の方自身の経験を踏まえ、学習者の留学をサポートしやすい環境にある。また、家族の方は留学経験が学習者に与える影響を理解していると考えられる。かなり高い割合で家族の影響によって留学をするということに関係していそうだとと言える結果であった。

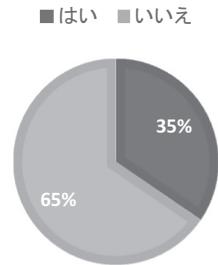


図3 家族について

5.1.4. 英語能力

基本情報の一部に英語能力を問うために、TOEIC、TOEFL ITP、英検の点数を記入してもらった。検定によって回答者人数にばらつきがあったため、CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）を用いて回答者の英語能力を分類して分析することにした（表2）。また、複数の試験を受験したことがあると回答があった場合、CEFRのレベルが一番高いものを採用した。キャリア・イングリッシュ課程生、留学経験者、そしてその他の学生で分類し、比較検討をした。その際、キャリア・イングリッシュ課程生であり、さらに留学経験者でもある人は、両方に人数をカウントしている。

結果として、キャリア・イングリッシュ課程生または留学経験者は、その他の学生に比べ、英語能力が高い人が多いことが分かった。例えば、C1とB2は、キャリア・イングリッシュ課程生と留学経験者のみが取得している。さらに、C1に関しては、取得者は2名のみであり、2名ともキャリア・イングリッシュ課程生かつ留学経験者であった。このように、全体的にみて、キャリア・イングリッシュ課程生と留学経験者は英語能力が高いことが分かる結果であり、そこから、英語学習に対する意識も高いのではないかと推測できる。

表2 CEFR ごと的人数

	C2	C1	B2	B1	A2	A1	判定不可
キャリア・イングリッシュ課程生	0人	2人	1人	15人	5人	2人	1人
留学経験者	0人	2人	4人	13人	2人	0人	1人
その他の学生	0人	0人	0人	26人	8人	4人	7人
合計人数	0人	2人	4人	48人	15人	6人	9人

5.2. 現在の英語に対する意識

問8では、8項目に分け、回答者の現在の英語に対する意識について聞いている。アンケート結果は表3の通りである。また、平均、標準偏差、中央値、そして最頻値については表4の通りである。現在の英語学習に対する意識は全体的にみて高い結果となっている。また標準偏差も問8-5を除き1.00以下となっており、回答のばらつきも少ないことが分かる。特に、問8-3では「当てはまる」「少し当てはまる」を88%の人が選択していることから、英語学習をする必要性を強く感じており、現在の英語に対する意識の項目の中で最も高い結果となっている。しかし、問8-4の平均2.30と問8-8の平均2.67の

表3 調査対象者の情意項目別人数

	1. 当てはまらない	2. 少し当てはまらない	3. 少し当てはまる	4. 当てはまる
8-1. 英語が好きだ	8人	12人	31人	33人
8-2. 外国の文化や習慣に興味・関心がある	4人	6人	33人	41人
8-3. 私にとって英語を勉強することは必要だ	3人	7人	24人	50人
8-4. 英語はできる方だ	18人	31人	30人	5人
8-5. 留学の経験がある／予定がある／してみたい	9人	17人	25人	33人
8-6. 将来、英語を使う仕事をしたい／する予定だ	11人	26人	28人	19人
8-7. 将来、私は今よりも英語で話す機会が増えると思う	6人	24人	27人	27人
8-8. 外国人の質問に答えられる (例:道案内)	7人	28人	38人	11人

表4 情意項目の特徴

	平均	標準偏差	中央値	最頻値
8-1. 英語が好きだ	3.10	0.95	3	4
8-2. 外国の文化や習慣に興味・関心がある	3.33	0.81	3.5	4
8-3. 私にとって英語を勉強することは必要だ	3.45	0.80	4	4
8-4. 英語はできる方だ	2.30	0.88	2	2
8-5. 留学の経験がある／予定がある／してみたい	3.00	1.02	3	4
8-6. 将来、英語を使う仕事をしたい／する予定だ	2.69	0.97	3	3
8-7. 将来、私は今よりも英語で話す機会が増えると思う	2.94	0.92	3	4
8-8. 外国人の質問に答えられる (例:道案内)	2.67	0.83	3	3

結果から、情意の中でも自信に関する質問は、他の3つの情意（統合的動機、道具的動機、意欲）に比べて低いことが目立つ。特に問8-4に関しては最頻値が2であり、多くの人が英語はあまりできる方ではないと感じていることが分かった。さらに、CEFRのレベルがC1の2人に関しては、問8-4を「少し当てはまる」と回答していることから、CEFRのレベルに比例して、自信も変化するわけではないことが明らかとなった。

問8-6に関しては留学経験者とキャリア・イングリッシュ課程生の回答を調べてみた(表5)。問1より留学経験者は22人であり、その中でキャリア・イングリッシュ課程も履修している人は10人いることが分かった。問8-6の結果として、留学経験者かつキャリア・イングリッシュ課程生のうち、90%の人が将来、英語使う仕事に前向きな回答となっている。留学経験者では58%という結果であり、英語学習への意識の違いが現在のキャリア・イングリッシュ課程の履修の有無で異なってくることが分かった。また、キャリア・イングリッシュ課程生は82%の人が前向きな回答となっていた。留学経験者は、その他の学生に比べて、英語能力が高いことは明らかとなったが、現在の英語学習に対する意識はキャリア・イングリッシュ課程生に少し劣る結果であった。吉村・中山(2010)で、「参加者が海外研修から帰国した後、研修期間中に伸びた英語力をどのようにして持続させていくのか、あるいはどのようにしてレベルアップしていくのかを考える必要がある。」(p.51)と述べていたように、留学後のモチベーション維持のプログラムとして、キャリア・イングリッシュ課程を履修することは効果的だと考える。

表5 問8-6の留学経験者とキャリア・イングリッシュ課程生の回答の比較

	1. 当てはまらない	2. 少し当てはまらない	3. 少し当てはまる	4. 当てはまる
留	3人	2人	4人	3人
留+キャ	0人	1人	5人	4人
キャ	0人	3人	4人	10人

5.3. 現在の英語学習に最も影響を与えた時期

問9では、アンケート対象者の現在の英語学習に最も影響を与えた時期を調べた(図4)。その際、現在の英語に対する意識についての問8-1から問8-8までの回答を点数化し、全体の平均をとり(平均点23.5点)、平均点以上の点数を獲得している人を、本研究では英語学習への意識が高いとみることにした。選択した時期での比較(表6)に加えて、キャリア・イングリッシュ課程生と留学経験者、その他の学生での比較(表7)、またCEFRに分けての比較(表8)もした。

まず、図4によると、小学校入学前と小学生を選択した人は、合計13人であり、そのうち6人の46%が問6で「はい」と回答していることが分かった。特に小学校入学前に至っては、物心がつき始めたころであり、自分自身で英語学習をしたいと考える人は少ないと考えていたため、予想としては、もう少し割合は高いと考えていた。しかし自由記述を見ると、問6には該当しないものの、家族が積極的に早期英語教育に力を入れていることが分かった。そのため、現在の英語学習に対する意識は8人の62%の人の意識が高いという結果になった。さらに小学校入学以前を選択している人は100%現在の英語学習に対する意識が高い結果であった。英会話教室に通っていたという人が多く、小さい頃から英語学習を始めていたために、英語を勉強というよりは遊び感覚で学んでいたと書いてあった。また、その時の楽しさから英語学習への不安は抱くことはないという意見もあった。小学校入学以前から小学校にかけては、楽しく英語を学ぶことに重点を置くことが可能であり、学習者も生活の一部として英語を取り入れやすいのではないかと考える。また英語教育を早く受けていることで、中学へ入学した時に余裕を持って授業に取り組むことができるのではないだろうか。そのため、現在も英語学習への意識が高い人が多くいるのだと考えられる。

中学生を選択した人は19人であったが、選択した人の中に、中学生になり本格的な授業になったことで苦手になったという意見が多くあり、小学校で受けていた授業や英語活動とのギャップがあったためだと考えられる意見である。Covington & Dray (2002)

によると、中学校へ進学すると、小学校とは学校環境が大きく異なるため、教育環境の変化による学習意欲の低下が明らかになったと報告している。さらに、中学校では成績重視の教育環境になると考えられ、学業に対する有能感の低下が学習意欲の低下を引き起こしているとしている。このようなことは、今回の研究結果にも当てはまると考えられ、現在英語学習への意識が低いと考えられる人が58%で時期別にみた際に最も多い結果となった。つまり、授業形式や学校環境のキャップを解消していくことで学習者の英語学習意識が高められるのではないかと考える。

高校生を選択した人は42人（50%）と一番多い結果となっている。先にも述べたように、今回は東京女子大学生の1年生から4年生にアンケート調査を実施しているため、最も近い時期が高校生になる。そのため、予想としても高校生の頃の影響を受けている人は多いと考えていた。高校生を選択した人も、意識が低いと思われる人の方が上回っている。高校の英語授業の多くが大学受験を意識した形式になっているため、学習者自身、英語学習に何かしらの目的を持って勉強しないと、知識を増やしていく授業が苦痛になってしまうのではないかと。しかし、受験のための勉強量をこなすため、受験勉強をきっかけに英語が得意になったという意見もあり、大学受験に合格することを目的や目標としたことをきっかけに意識が高まったと考えられる回答もあった。

大学生を選択した人は12%である10人であった。ここ数年が自分にとって英語学習への影響が最も強いとのこともあり、70%の人が現在の英語学習に対する意識が高い結果となった。おそらく、東京女子大学ではネイティブの先生方も多くいる中で英語学習ができるという学校環境が整っているため、意識が高まった人が多くいるのではと思われる。また、大学生を選択した人の60%の人が問3で「はい」と回答しており、キャリア・イングリッシュ課程生であることも分かり、意識が高いことは明らかである。

■ 小学校入学前 ■ 小学生 ■ 中学生 ■ 高校生 ■ 大学生

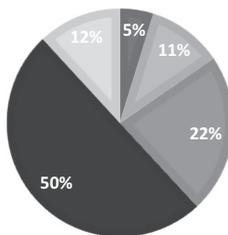


図4 調査対象者の最も影響を与えた時期別割合

表6 問9の時期別人数

	小学校入学前	小学生	中学生	高校生	大学生
平均点以上	4人	4人	8人	18人	7人
平均点以下	0人	5人	11人	24人	3人
合計人数	4人	9人	19人	42人	10人

次にキャリア・イングリッシュ課程生、留学経験者、そして、その他の学生を比較した(表7)。現在の英語に対する意識が高い結果と考えられる平均点以上の回答者の割合はそれぞれ、85%、73%、22%という結果であった。キャリア・イングリッシュ課程生と留学経験者の方が、その他の学生に比べ、意識が高い学生が圧倒的に多いということが分かった。

表7 調査対象者と現在の英語に対する意識

	キャリア・イングリッシュ課程生	留学経験者	その他学生
平均点以上	23人	16人	11人
平均点以下	4人	6人	39人
合計人数	27人	22人	50人

CEFR ごとにも現在の英語に対する意識を比較していく(表8)。CEFR レベルが高い方が、平均点以上を獲得している人の割合が高いことが分かる。判定不可の9人中7人が1年生ということもあり、これから大学生活を送っていく中で、大学1年生はTOEIC や TOEFL を取得するのではないだろうか。

表8 CEFR ごとの現在の英語に対する意識

	C1	B2	B1	A2	A1	判定不可
平均点以上	2人	3人	26人	5人	2人	6人
平均点以下	0人	1人	22人	10人	4人	3人
合計人数	2人	4人	48人	15人	6人	9人

5.4. 学習環境

問10から問12は家庭環境、学校環境、そして、人間環境がそれぞれ現在の英語学習に対する意識にどのように影響しているのかをみるために、問9で選択した時期を思い出

しながら回答してもらった。また、4段階尺度形式で回答してもらった。

家庭環境に関する項目である問10は10項目あり、各質問項目の平均、標準偏差、中央値、そして最頻値については表9の通りである。全体的にみて、平均は3.00未満で高いとは言えず、現在の英語に対する意識への家庭環境の影響力はあまり大きくないと言えそうである。今回の3つの学習環境の中で、最も変化しにくい環境ではあるが、最も違いが出やすい環境でもあると考える。その理由は、家庭環境は英語学習者の学習意識を高めるための決まりもなく、変えようと教育する人もいないため、それぞれの家庭の特徴があると考えられる。そのため、一概に共通の現在の英語に対する意識への影響が大きいものを見つけることは難しいということが分かった。問10-4と問10-6の平均はそれぞれ2.69、2.96となっており、家族の英語学習者に対する関心の高さが読み取れる。鷺見(2014, p.9)は、「外国語を学ぶ意味や意欲には、家族の興味・関心の影響が認められ、決して無視できない要因であることが確認された。」としており、このような研究結果からも家族からの関心が高いことは学習者の意欲に関係していると考えられ、本研究でも同様な結果が得られた。問10-3は平均1.83、標準偏差1.11と回答にばらつきがみられるが、最も平均が低い値となっている。また中央値は1という結果になっており、多くの

表9 家庭環境項目

	平均	標準偏差	中央値	最頻値
10-1. 英語の授業で習ったことを家族に話した	2.63	1.00	3	3
10-2. 家族に褒められたいから英語学習をした	2.13	0.95	2	2
10-3. 英語のテストや成績について、家族から怒られた経験がある	1.83	1.11	1	1
10-4. 家族は自分の英語の成績に関心が高かった	2.69	1.05	3	3
10-5. 家族と海外旅行に行ったことがある	2.32	1.43	1	1
10-6. 家族は学校行事に積極的だった(例:授業参観、運動会)	2.96	0.97	3	3
10-7. 家族からの影響を受けて、外国に行きたいと思うようになった	2.31	1.22	2	1
10-8. 家族からの影響を受けて、外国の文化や習慣に興味を持った	2.39	1.19	2.5	1
10-9. 家族からの影響を受けて、外国人とコミュニケーションをとりたいと思うようになった	2.18	1.16	2	1
10-10. 家族からの影響を受けて、英語を話す仕事に就きたくなった	2.11	1.08	2	1

回答者が英語のテストや成績について、家族から怒られた経験はほとんどないということが分かった。問10-5は標準偏差1.43であり、回答のばらつきが最も大きい。平均値は2.32、中央値また最頻値共に1であり、今回の調査対象者は現在の英語学習に最も影響した時期には、家族と海外旅行に行ったことがない人がほとんどであることから、家族との海外旅行は英語学習の意欲に大きくは関係していないようだ。さらに問10-7の最頻値が1という結果からも、家族との海外旅行や、家族からの影響で外国へ行きたいと思う気持ちは、現在の英語学習に対して影響力は大きいとは言えないと思われる。

次に、学校環境に関する項目である問11は12項目あり、各質問項目の平均、標準偏差、中央値、そして、最頻値は表10の通りである。問11-6と問11-7も、平均はそれぞれ2.80、3.02と高く、標準偏差も0.97、0.86とばらつきも比較的少ない。すなわち今回の回答者は英語ができる方が社会的地位は高いと考える人が多いことが分かった。また、問11-2は平均2.81、中央値3であり、先生を好いている人は多くいるが、問11-8の平均は2.19

表10 学校環境項目

	平均	標準偏差	中央値	最頻値
11-1. 英語の先生を尊敬していた	2.70	1.05	3	3
11-2. 英語の先生が好きだった	2.81	1.02	3	3
11-3. 英語の授業は楽しかった	2.93	0.99	3	3
11-4. 英語の授業中、積極的に発言していた	2.49	0.96	2	2
11-5. 英語の授業を通して、英語で会話することが得意になった	2.32	0.98	2	2
11-6. 英語ができる人は、立派な人だと思われると思った	2.80	0.97	3	3
11-7. 将来、英語ができた方が得ををすると思い、英語学習をした	3.02	0.86	3	3
11-8. 英語の先生に褒められたいから英語学習をした	2.19	1.05	2	2
11-9. 学校での学習や先生の影響を受けて、外国に行きたいと思うようになった	2.44	1.09	2.5	3
11-10. 学校での学習や先生の影響を受けて、外国の文化や習慣に興味を持った	2.67	1.05	3	3
11-11. 学校での学習や先生の影響を受けて、外国人とコミュニケーションをとりたいと思うようになった	2.65	1.07	3	3
11-12. 学校での学習や先生の影響を受けて、英語を話す仕事に就きたくなった	2.37	1.05	2	2

と学校環境において最も低い値となっており、また中央値2から、英語学習をする目的は先生に褒めてもらうためではなく、上記のように自分自身の社会的地位のためである人が多くいると考えられる。また、問11-5は平均2.32、標準偏差0.98であり、平均も高くはなく、ばらつきも少なく、最頻値、中央値ともに2という結果であった。この結果からも、今回の調査対象者の英語学習に対する自信のなさがうかがえる。これはまた、授業内容に関しての問題点でもあると考える。つまり、学校側は学習者の4技能向上を目指し授業を進めているのに対し、話すことを得意と感じることができる学生が少ないことは、文部科学省が定めている授業目標が達成できていないのではないだろうか。

人間環境に関する項目である問12は12項目あり、各質問項目の平均、標準偏差、中央値、そして最頻値については表11の通りである。全体的にみて平均がかなり高い結果と

表11 人間環境項目

	平均	標準偏差	中央値	最頻値
12-1. 同世代の仲間に英語を話せる人がいる／いた	3.14	1.08	4	4
12-2. 同世代の仲間に、尊敬する人がいる／いた	3.00	1.04	3	4
12-3. 同世代の仲間に外国の文化に詳しい人がいる／いた	2.96	1.10	3	4
12-4. 海外に同世代の知り合いがいる(英語圏)	2.27	1.33	2	1
12-5. 英語学習をしていく上で、ライバルとなる仲間がいた	2.64	0.98	3	3
12-6. 英語のテストの点数で仲間には負けなかった	2.98	0.96	3	3
12-7. 仲間に褒められたい／尊敬されたいから英語学習をした	2.44	1.08	2	2
12-8. 他人より英語の成績が良いと、優れている気持ちになった	2.82	0.95	3	3
12-9. 同世代の影響を受けて、外国に行きたいと思うようになった	2.61	1.09	3	3
12-10. 同世代の影響を受けて、外国の文化や習慣に興味を持った	2.55	1.02	3	2
12-11. 同世代の影響を受けて、外国人とコミュニケーションをとりたいと思うようになった	2.63	1.05	3	3
12-12. 同世代の影響を受けて、英語を話す仕事に就きたくなった	2.29	1.04	2	2

なっている。問12-1と問12-3の平均はそれぞれ3.14、2.96となっており、また最頻値は共に4であることから、今回の回答者の多くは、同世代から英語学習における影響を受けたことが分かる。問12-5と問12-6の平均はそれぞれ2.64、2.98と高く、英語学習をしていく上でライバルと意識している相手がいる回答者が多いことが分かった。さらに問12-8の平均は2.82と英語の成績が良いと優れている気持ちになる回答者も多くいる。すなわちライバルに負けたくないという気持ちから学習に励み、また、そのライバルとなる相手がいるからこそ英語の成績が良いと優れていると感じるとようである。また、学校環境における問11-6と問11-7の結果から、英語ができると社会的地位が高いと思う人が多い結果からも問12-8の結果は理解できる。全体的に平均値が高いことから、英語学習において人間環境である同世代からの影響を受けやすいと考えられる。

5.5. 英語学習における情意要因

問13から問15では、英語学習に関連する情意要因として、良い影響や刺激、不安、そして、プレッシャーの3つ項目を作り、それぞれの感情がどの環境で最も生じたかを聞いている。また、環境ごとに、選択した人の現在の英語に対する意識を見ることにした。

問13では、英語学習において最も良い影響や刺激を受けたと思う環境について聞いている(図5)。家庭環境を選択した人は18%(15人)で、その中で現在の英語に対する意識が高い人は8人の53%であることが分かる。さらに、留学経験者は全体の53.3%で過半数を超えており、中には、家族からの勧めで留学へ行ったという回答もあった。しかし、問6「家族の中で英語が話せる人、または外国文化に詳しい人がいるか」で「はい」と回答した29人中、28%の8人しか家庭環境を選択しておらず、予想を下回る結果となっていたが、家族の中で英語が話せる人、または外国文化に詳しい人がいなくとも、「両親の海外での新婚旅行の写真を見せてもらったことで、海外への憧れが高まった」という家族の思い出が現在の英語学習への意識を高めるきっかけとなっていると考えられる意見があった。また問9で、小学校入学前を選択した人の75%は家庭環境を選択していることが分かった。学習し始めの、特に低学年にとっては、家族の影響は大きいと考えられる。次に、学校環境を選択した人は41人の49%と最も多い結果となった。「学校の先生が好きだったから。」や「授業が楽しかったから。」という意見が多くあり、問11-2や問11-3からも分かる結果であった。しかし、英語学習において最も良い影響や刺激を受けたと思う環境で学校環境を回答した人は、現在の英語に対する意識が低いと思われる人が多い結果となっていた。現在の英語に対する意識が、平均点以上の人の共通点とし

■ 家庭環境 ■ 学校環境 ■ 人間環境 ■ その他

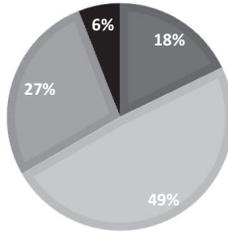


図5 英語学習で最も良い影響や刺激を受けたと思う環境別割合

表12 英語学習で最も良い影響や刺激を受けた環境（問13）別人数

	家庭環境	学校環境	人間環境	その他
平均点以上	8人	18人	13人	2人
平均点以下	7人	23人	10人	3人
合計人数	15人	41人	23人	5人

て、「週1回アメリカの先生と英語を話すことができたから」や「海外へ行くプログラムがあったから」など、能動的に学習者自身で英語学習を行っていることが分かった。人間環境を選択した人は27%（23人）であった。表12から同世代からの影響は、英語意識を高める可能性があることが分かった。「友人が英語を話せるように努力しているのを見て感化されたから。」や「海外に興味を持った友人と話が合ったから。」などの意見があり、友人に英語を得意とする人や、友人に負けたくないというライバル意識から良い刺激を受けたという人が多くいることが分かった。つまり、同世代の人と共通の興味を持ち、それについて話すことは、学習意識を高める効果があるのではないだろうか。

問14では、英語学習において最も不安が高かったと思う環境について聞いている（図6）。不安に関する質問で「その他」を回答した人は22人の26%と多く、人によって感じ方が多様であることが分かる。その選択理由としては、留学中のコミュニケーションの不安や予備校での受験勉強が多くを占めていた。家庭環境を選択している人は14%（12人）であった。家庭環境からの不安は現在の英語に対する意識を高める可能性があり、親の期待に応えるために学んだという意見が多くあったことから分かる。しかし、自由記述欄の回答から、現在の英語に対する意識が高い人の共通点を見つけることはできなかった。不安が高かったと思う環境に関しても、学校環境が43%と最も高い結果と

■ 家庭環境 ■ 学校環境 ■ 人間環境 ■ その他

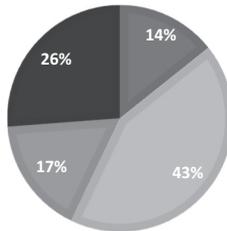


図6 英語学習で最も不安が高かったと思う環境別割合

表13 英語学習で最も不安が高かった環境（問14）別人数

	家庭環境	学校環境	人間環境	その他
平均点以上	7人	13人	7人	12人
平均点以下	5人	23人	7人	10人
合計人数	12人	36人	14人	22人

なっていることから、授業中やテストに不安を感じる回答者が多くいることが分かり、特に授業中に関して、当てられること、または間違えることが恥ずかしいという意見があった。テストでは、「点数ですべてを判断されることでモチベーションが維持しにくい。」という意見があり、問11-4「英語の授業中、積極的に発言していた」の平均が2.49、問11-5「英語の授業を通して、英語で会話をすることが得意になった」の平均が2.32と低いことから分かる結果である。人間環境は14人の17%という結果であり、受験勉強中の友人と比較した際に不安を感じた人が多くいることが分かった。問12-1「同世代の仲間に英語を話せる人がいる／いた」の中央値4より、英語を話せる友人が多くいるということが分かった。さらに、問12-5「英語学習をしていく上で、ライバルとなる仲間がいた」の平均が2.64、問12-6「英語のテストの点数で仲間に負けたくなかった」の平均が2.98であることから、友人と比較した際に不安が高まることが多くあるのではないかと考える。

問15では、英語学習において最もプレッシャーを受けたと思う環境について聞いている（図7）。プレッシャーに関しても不安と同様に、18人の21%が「その他」を選択していることから、感じ方が多様であることが分かった。家庭環境は18%（15人）が選択していることから、現在の英語に対する意識を高める可能性は低く、不安の結果とは多

■ 家庭環境 ■ 学校環境 ■ 人間環境 ■ その他

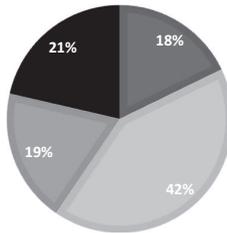


図7 英語学習で最もプレッシャーを受けたと思う環境別割合

表14 英語学習で最もプレッシャーを受けた環境（問15）別人数

	家庭環境	学校環境	人間環境	その他
平均点以上	6人	15人	10人	10人
平均点以下	9人	20人	6人	8人
合計人数	15人	35人	16人	18人

少異なる結果であった。自由記述欄から家族からの期待の大きさに関する意見が56%あったが、現在の英語学習に対する意識へどのような影響を与えたのかは分からなかった。学校環境に関しては、問13と問14と同様に最も高い割合になっている。学校環境は不安の回答と似ている点が多くあり、テストの点数によって順位が決まってしまうことが挙げられた。留学経験者の41%が英語学習において最もプレッシャーを受けたと思う環境に学校環境を選択しており、学校では英語学習ができて当然と思われることが多く、それがプレッシャーだったというものであった。人間環境は16人の19%という結果であり、人間環境からの影響でプレッシャーを感じると現在の英語に対する意識が高まる傾向にあることが分かった。同じ時期に、また、同じ環境で学習しているため、動機づけを高いまま維持しやすいのではないかと考える。

5.6. 研究課題に関する結果と考察

最後に4つの研究課題についての分析結果を提示して考察する。

5.6.1. 研究課題①

まず初めに、研究課題①「英語学習において情意要因との関係が最も強い環境は何か」

表15 情意要因項目と学習環境との相関

		現在の英語に 対する意識	家庭環境	学校環境	人間環境
現在の英語 に対する意 識	Pearson の相関係数		.39	.50	.61
	有意確率 (両側)		.00	.00	.00
家庭環境	Pearson の相関係数	.39		.40	.46
	有意確率 (両側)	.00		.00	.00
学校環境	Pearson の相関係数	.50	.40		.59
	有意確率 (両側)	.00	.00		.00
人間環境	Pearson の相関係数	.61	.46	.59	
	有意確率 (両側)	.00	.00	.00	

について分析するために、現在の英語に対する意識の項目の合計点数と、3つの環境のそれぞれの合計点数間の相関分析を実施した(表15)。その結果、情意要因との関係が最も強い環境は、人間環境であることが分かり ($r=.61, p=.00$)、問12の人間環境についての項目12問中9問の75%の平均が2.5を上回っていることから分かるように、現在の英語に対する意識に影響力が最も大きいと言える。続いて学校環境 ($r=.50, p=.00$)、家庭環境 ($r=.39, p=.00$) の順に情意要因との関係が強かった。鹿毛(2013)は「友だちとの関わりは、子どもたちにとって学校生活の中核だと言っても過言ではないだろう。」(p.286)と述べており、学校環境における人間環境の影響力の大きさが分かり、今回の結果も納得できる。つまり、学校に通い、英語を習っていく過程で、生徒同士の関係が最も重要だと考える。

5.6.2. 研究課題②

次に、研究課題②「英語学習における家庭環境と情意要因の関係はどのようなものか」について分析したところ、家庭環境は、学校環境や人間環境より情意要因との関係性が弱いことが分かった(表15)。家庭環境が英語学習者に及ぼす影響として見られたものは、現在の英語に対する意識についての質問項目の中で、統合的動機、道具的動機、そして意欲の3つであった。問10-9「家族からの影響を受けて、外国人とコミュニケーションをとりたいと思うようになった」と問8-2「外国の文化や習慣に興味・関心がある」の相関は中程度 ($r=.41, p=.00$)、問10-9と問8-5「留学の経験がある／予定がある／してみたい」の相関も中程度であった ($r=.41, p=.00$)。問13「英語学習において最も良い影響

や刺激を受けたと思う環境」で、家庭環境を選択した人の中で、留学経験者は33%であった。また、問6「家族の中で英語が話せる人、または外国語文化に詳しい人がいるか」で「はい」と回答した人は、53%であり、「家族からの勧めで留学へ行くことができ、学習意欲が高まった。」という回答からも、留学を決断するにあたっては家族からの影響は大きいと考えられる。さらに問10-10「家族からの影響を受けて、英語を話す仕事に就きたくなかった」と問8-6「将来、英語を使う仕事をしたい／する予定だ」との相関は中程度あり ($r=.50, p=.00$)、問10-10を「当てはまる」と回答した人の73%が問6にて「はい」と回答していることが分かった。つまり、家族の影響を受けて外国の文化や習慣に興味や関心を持つことは、学習者自身も家族と同様に外国の文化や習慣に興味や関心を持ちやすいため、留学をするに関係があると考えられる。

今回の調査対象者の家族が学習者（対象者）に対して関心が高いことが問10-4「家族は自分の英語の成績に関心が高かった」と問10-6「家族は学校行事に積極的だった（例：授業参観、運動会）」から読み取ることができた。問10-4を「当てはまる」または「少し当てはまる」を選択している人の55%が現在の英語に対する意識が平均点以上の人だと分かった。つまり親からの関心が高いほど現在の学習意識が高まる傾向がある。この結果は、鷺見（2014）の、「外国語を学ぶ意味や意欲には、家族の興味・関心の影響が認められ、決して無視できない要因であることが確認された。」(p.9) という研究結果と一致していた。また、鷺見（2014）の「家族ができるということが学習の負担になっていると考えられる。」(p.6) という考察から、家族の関心が英語学習者への不安やプレッシャーにつながる可能性も考えたが、問10-3「英語のテストや成績について、家族から怒られた経験がある」の平均は1.83と低く、全体的に見てそのような経験は少ないようである。さらに、問14「英語学習において最も不安が高かったと思う環境」と問15「英語学習において最もプレッシャーを受けたと思う環境」で家庭環境を選択した人は、それぞれ15%、18%と全体的に少なく、本研究では家族が英語学習等をできることが学習者の負担になっているということを確認することはできなかった。しかし、問14の家庭環境から感じる不安によって、親の期待に応えられるよう学んだという意見があった。問10-3「英語のテストや成績について、家族から怒られた経験がある」や問10-4「家族は自分の英語の成績に関心が高かった」と関係があると考えられ、家庭環境から感じる不安は学習に対する意識を向上させる可能性があると考えられる。

以上の結果より英語学習における、家庭での環境作りとして、英語学習者の家族がまず学習者の成績に興味や関心を持つことが重要だと考える。その理由として、生活を共

にしている家族との環境では、幼い頃より近くでその親や兄弟の様子を見ることができ、学校環境での先生や人間環境における友人よりも長い時間影響を受け続けることになる。そのため英語学習者が幼い頃は特に家庭環境の影響力は大きいと予想していた。ゆえに、問13「英語学習において最も良い影響や刺激を受けたと思う環境」で家庭環境を選択した人は、問9「現在の英語学習に最も影響を与えた時期」で小学校入学前、小学生、そして中学生を選択した人が60%を占める結果であった。また、鷲見(2014)は、「家族の中で英語が得意な人がいることで、英語に対する能力や意識が高いという結果が得られた。」(p.9)と主張している。本研究では、問6「家族の中で英語が話せる人、または外国語文化に詳しい人がいるか」で「はい」と回答している学習者の62%は学習意識が高いことは確認できたが、家族の方が英語を得意とするかどうかは調査することができなかった。しかし問7-②「家族の中で英語が話せる人、または外国文化に詳しい人がおり、その方がしていたことは何か」の結果として、66%の家族の方が「a.留学」または「b.海外に住んでいる/いた」と回答していることから、英語が得意と言えるのではないかと考える。よって、家族の中で英語が得意な人がいることで学習者の英語に対する意識は高まりやすいと考える。つまり、家族が自分の経験等を話し伝えることで、学習者の英語学習に対しての意識が高まるとも考えられる。家庭環境においては、学習者の近い人物である家族が、英語学習に期待、また関心を持つことで、学習者の意欲を高めることができるだろう。

5.6.3. 研究課題③

次に研究課題③「英語学習における学校環境と情意要因の関係はどのようなものか」について考察していく。本研究では、学校環境は、統合的動機、道具的動機、そして自信に関する情意と関係があることが分かった。英語学習をするにあたり、学校での学習は避けて通ることはできない。そのため、問13から問15の情意要因の質問全てにおいて学校環境を選んだ人が多かった。鹿毛(2013)は、教師の姿として、「学習者の学習意欲を喚起し、それを維持するために、具体的な教育環境をデザインするとともに、その環境をダイナミックにつくりかえるという仕事が含まれている。そして学習者にとっては、そのような教師の存在自体が学習環境なのである。」(p.288)と述べていることから、学校環境が英語学習に与える影響力の大きさを表していると言える。しかし、本研究の結果は学校環境が現在の英語に対する意識を高めている環境とは考えにくいものであり、現在の英語に対する意識が平均点以上の人の割合が全て44%を下回っていた。

統合的動機と相関が高かった学校環境項目は2つあり、まず、問11-3「英語の授業は楽しかった」と問8-1「英語が好きだ」の相関は中程度であった ($r=.43, p=.00$)。また、問11-3を「当てはまる」にした人の内、57%が問13「英語学習において最も良い影響や刺激を受けたと思う環境」で学校環境を選択したことが分かった。つまり、学習者が英語の授業を楽しみと感じる、もしくは、楽しいと思わせる学校環境は学習者にとって良い影響を与えるようである。また、問11-10「学校での学習や先生の影響を受けて、外国の文化や習慣に興味を持った」と問8-2「外国の文化や習慣に興味・関心がある」の相関は中程度あり ($r=.46, p=.00$)、学習者は、授業を通して異文化を知ることができ、授業がきっかけとなり、その後の興味や関心につながる可能性があると考えられる。次に、道具的動機との相関が高かったものは3つあった。問11-11「学校での学習や先生の影響を受けて、外国人とコミュニケーションをとりたいと思うようになった」と問8-3「私にとって英語を勉強することは必要だ」との相関は中程度あり ($r=.44, p=.00$)、学校環境が、外国人とコミュニケーションをとりたいと感じさせる環境として平均が最も高かった。例えば、東京女子大学においては、ネイティブの先生方も多くいる環境で英語学習ができるため、コミュニケーションをとりたいと感じることや、それをきっかけに英語学習の必要性を感じると考えられる。また、問11-7「将来、英語ができた方が得をすと思い、英語学習をした」と問8-6「将来、英語を使う仕事をしたい／する予定だ」の相関は中程度あった ($r=.47, p=.00$)。どちらの質問も将来についての質問であり、英語学習が将来に役立つと考え学習している人は、その後も学習意識が高いと考えられる。問11-12「学校での学習や先生の影響を受けて、英語を話す仕事に就きたくなった」と問8-6「将来、英語を使う仕事をしたい／する予定だ」の相関も中程度あった ($r=.52, p=.00$)。将来の仕事を考える上で、学校の学習や先生の影響は、他の環境の影響より強く受けることが分かった。学習者は学校の先生を見ることで、将来の仕事の想像が付きやすいと考える。自信との相関が高かったものは2つあった。問11-4「英語の授業中、積極的に発言していた」と問8-4「英語はできる方だ」の相関は中程度あった ($r=.41, p=.00$)。また、問11-4と問8-8「外国人の質問に答えられる (例：道案内)」との相関も中程度あった ($r=.40, p=.00$)。授業中という集団の中で発言ができるということは、それだけ熱心に学習に取り組んでいたと考えられる。また、学校環境というテストや試験で周りとの学習能力差がはっきりと出てくる環境においては、発言するという行為は周りとの英語能力を比較しやすいため、自信につながりやすいと考える。

学校環境は、今回の3つの環境の中で最も変わりやすい環境と考える。学年が変わる

とともに先生が変わることも多く、環境が変化してしまうため、継続的に影響を受けることが困難であろう。そのため、良い影響を与えることができたとしても、短期間で終わってしまい、学習者も継続してその学習意識を保ち続けられないのではないだろうか。今回の対象者の傾向として、問11-6「英語ができる人は、立派な人だと思われると思った」と問11-7「将来、英語ができた方が得をすると思ひ、英語学習をした」より、英語ができる人は社会的地位が高いと考える人が多いことが分かった。また八島(2003)は、「学習者にとって自分と社会や世界との関係において英語がどういう意味をもつか(つまり漠然とでも世界と自分をつなぐものと感じるかどうか)は、学習意欲に影響すると同時に、英語でコミュニケーションを図ろうとする傾向にも影響すると考えられる。」(p.90)と述べている。このことから学校環境は、英語学習者にとって影響力の大きい環境であるため、環境作りとして、英語学習をすることで将来どのようなことができるかなど、活かし方を想像させることが重要だと考える。そうすることで、学習者の学習意欲を高められるのではないだろうか。

5.6.4. 研究課題④

最後に課題研究④「英語学習における人間環境と情意要因の関係はどのようなものか」についての分析結果を提示して、それを考察していく。研究課題①から、英語学習において情意要因との関係が最も強い環境は、人間環境ということが分かった。さらに、本研究で調査した3つの環境の中で、人間環境は唯一4つの情意要因全てに関して関係性をみることができた。

まず、統合的動機と相関が高かったものについてまとめていく。問12-7「仲間に褒められたい／尊敬されたいから英語学習をした」と問8-1「英語が好きだ」の相関は中程度あり($r=.48, p=.00$)、問12-7と問8-2「外国の文化や習慣に興味・関心がある」の相関も中程度であった($r=.45, p=.00$)。仲間に褒められたい、尊敬されたいと言った気持ちは、学校が変わるなどの環境の変化に関係なく、同世代の関係は長く続くと考えられる。そのため、動機づけを高めることが可能だと考える。問12-10「同世代の影響を受けて、外国の文化や習慣に興味を持った」と問8-1「英語が好きだ」との相関は中程度あり($r=.40, p=.00$)、また、問12-10「同世代の影響を受けて、外国の文化や習慣に興味を持った」と問8-2「外国の文化や習慣に興味・関心がある」との相関も中程度あった($r=.46, p=.00$)。同世代の影響を受けて外国の文化や習慣に興味を持つことで、その仲間と共通の話題を持つことができるため、現在の英語に対する意識としても動機づけを高

いまま維持できるのではないかと考える。次に道具的動機と相関が高かったものは2つある。問12-1「同世代の仲間に英語を話せる人がいる／いた」と問8-3「私にとって英語を勉強することは必要だ」との相関は中程度あり ($r=.40, p=.00$)、問12-2「同世代の仲間に、尊敬する人がいる／いた」と問8-3の相関も中程度あった ($r=.42, p=.00$)。問12-1「同世代の仲間に英語を話せる人がいる／いた」と問12-2「同世代の仲間に、尊敬する人がいる／いた」の相関も中程度あった ($r=.69, p=.00$)。英語学習において、同世代の仲間に英語を話せるというのは、尊敬できるポイントだということが読み取れる。廣森・山森 (2003) は、「英語を手段として学習している場合でも、仲のよい友達が英語が得意だったり重要だと感じていたら、生徒は「自分もやってみよう」「ひょっとしたら、面白いのかもしれない」と感じるであろう。そのような認識がのちの行動に対して、肯定的な影響を与えよう。」(pp.237-238) と述べている。このことから同世代の仲間に英語を話せる人がいることで、英語の勉強をしてその相手に近づきたい気持ちが動機づけを高めると考えられる。次に、自信と相関が高かったものをみていく。問12-4「海外に同世代の知り合いがいる (英語圏)」と問8-8「外国人の質問に答えられる (例：道案内)」の相関は中程度あった ($r=.48, p=.00$)。海外に同世代の知り合いがいるということは、学校の先生など目上の人に比べてコミュニケーションも取りやすく、また同世代のため会話が弾みやすいため、意欲が向上し、実際にコミュニケーションをとることで、英語に対する自信につながるのではないだろうか。問12-5「英語学習をしていく上で、ライバルとなる仲間がいた」と問8-4「英語はできる方だ」の相関は中程度あり ($r=.45, p=.00$)、また、問12-6「英語のテストの点数で仲間には負けたくなかった」と問8-4の相関も中程度あった ($r=.44, p=.00$)。英語学習をしていく上でライバルが現れると、テストの点数などで負けたくないという気持ちから学習意識が高まるためだと考えられる。その後、そのライバルを意識してテストなどに勝利したなどの積み重ねが現在の英語学習において自信という形で出てくるのではないだろうか。次に、意欲と相関があるものを見ていく。問12-3「同世代の仲間に外国の文化に詳しい人がいる／いた」と問8-5「留学の経験がある／予定がある／してみたい」の相関は中程度あり ($r=.41, p=.00$)、留学の経験があることや、今後留学の予定や意欲がある人は、外国の文化に詳しい同世代の仲間がいる場合、その仲間から情報を得ようと努力するため、英語学習に対する意欲が高くなると考える。問12-9「同世代の影響を受けて、外国に行きたいと思うようになった」と問8-5との相関も中程度あり ($r=.47, p=.00$)、同世代のからの影響を受けて海外に行きたいと思うことで、より留学していることが想像しやすいためだと思

われる。また自分もできるのではないかという英語学習の意欲にもつながるのだろう。

以上の結果から、英語学習に対する意識を高めるために人間環境はとても重要だということが分かった。同世代の仲間に対して尊敬の念やライバル意識を持つことは、学習意欲の向上につながりやすいと考える。つまり、学習者は自分を変えてくれる、また、自分に興味を持たせてくれる同世代の仲間からの影響を大きく受けている。そのために、同世代の学習者同士でコミュニケーションをとることのできる環境が必要だと言える。

6. おわりに

本研究では、東京女子大学の1年生から4年生の計84人を対象に、英語学習者の学習環境の違いによって現在の英語に対する意識がどのように異なっているのかについて調査した。その主な結果は以下の通りである。

学習環境を家庭環境、学校環境、そして人間環境の3つに分け、その中で最も情意要因と関係が強かった環境は人間環境であった。その理由として、同世代の仲間だからこそ、英語学習の意識の高い学生が近くにいたとき、学習者自身も理想とする自分になれる可能性を大いに感じられるからだと考える。さらに、自分を変える同世代の仲間からの影響を大きく受けており、様々な仲間と関わるのが重要だと考えられる。また、家庭環境においては、家族が学習者の学習意識に興味を持つことが重要であることが分かった。学校環境においては、英語能力が高いほど社会的地位が高まると考える学習者が多く、英語学習をすることで将来への活かし方を想像させることで学習意識が高まると考える。

本研究の結果からは、英語学習者の学習環境と情意要因の関係性があることが分かった。さらに、今回の3つの学習環境が学習者の情意要因に及ぼす影響はそれぞれ異なること分かり、それぞれの学習環境は、英語学習において情意要因と密接に関係していると言える。新井(1995)は、「子ども1人ひとりの興味・関心や楽しみ、喜びあるいは不安や心配、学習や能力についての自己認知や自己概念、さらには勉強に対する家庭のプレッシャーなど、一言で言い表すならば、1人ひとりの子どもの動機づけの特徴を個別的に理解しなければならぬ。」(p.13)としており、本研究でも、学習者によって環境も異なり、さらにそこからの影響も異なるため、学習者をよく理解し、それぞれの学習意識が高まるような環境づくりが重要だと考えられる。

今回のアンケートでは、英語学習者を中心とし、学習環境と情意要因の関係性を調査

したため、環境を提供している側の家族や先生、また友人が何に重点を置き学習者と接しているかを知ることではできなかった。今後は学習者側と環境を提供する側の考えを共に調査することで、より詳しく学習環境と情意要因と関係性を知ることができると考える。さらに、そこから学習者の家庭環境を背景とした、学校での最適な英語教育の研究に期待したい。本研究では、女子大学生のみに調査しているため、男女の違いや、調査対象者の年齢を変えることでも結果が異なってくることが予想される。今後も学習者の学習環境と情意要因の関係についての研究で、どのような環境が英語学習者の英語学習意識が高まる環境と見なされるかに注目したい。

注

i キャリア・イングリッシュ課程とは、「2年～4年次にわたって、英語力はもとより、国際社会で活躍するための心構えと知見、考察力、コミュニケーション能力、行動力を育成」するプログラムのこと。

ii 「現在の英語に対する意識」を問8、「影響を与えた時期」を問9、①家庭環境を問10、②学校環境を問11、③人間環境を問12、良い影響や刺激を問13、不安を問14、プレッシャーを問15とする。

参考文献

- 新井邦二郎 (1995) 『教室の動機づけの理論と実践』 金子書房。
- 白井博 (2014) 「小学校から中学校への学校間移行の学校適応と学習動機に対する影響(4) — 学習方略・学習観・友人観に対する予測要因の縦断的研究 —」 『札幌学院大学人文学会紀要』 第95号 pp.69-82。
- 英語4技能試験情報サイト (2017) 〈http://4skills.jp/qualification/comparison_cefr.htm〉 2017/12/13閲覧。
- 王玲静 (2013) 『第二言語習得における心理的不安の研究』 ひつじ書房。
- 外務省 (2017) 「海外在留邦人数・進出日系企業数の調査(平成29年要約版)」 〈http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/press4_004674.html〉 2017/12/13閲覧。
- 喜田慶文 (2008) 「英語学習意識と英語能力の相関性に関する調査—観光系学生の英語の力と動機づけに関する事例研究」 『観光学研究』 第7号 pp.65-81。
- 鹿毛雅治 (2013) 『学習意欲の理論—動機づけの教育心理』 金子書房。
- GG Media 編集部 (2017) 「TOEFL の ITP でのスコアレベルの目安 | スコアの見方・基準のスコ

- アは？」〈<https://mayonez.jp/topic/4070>〉2017/12/13閲覧。
- 鷺見安里紗 (2014) 「中学生の現状から考察する小学校外国語活動の課題—学校間・家庭間格差に注目して—」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』第17号 pp.1-10.
- 東京女子大学、キャリア・イングリッシュ課程 〈<http://office.twcu.ac.jp/univ/academics/sas/curriculum-qualification/career-english-island/>〉2017/12/13閲覧。
- 廣森友人・山森光陽 (2003) 「有能感を高める教室：学習者・教師・学級風土が作り出す相互作用」『海外教育メディア学会機関誌』40巻 pp.231-239.
- 文部科学省 (2017) 「移行措置期間中の標準授業時間数について」〈www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773_001.pdf〉2017/12/13/閲覧。
- 文部科学省 (2011) 「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領書いてのポイント」〈www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773_001.pdf〉2017/12/13閲覧。
- 八島智子 (2003) 「第二言語コミュニケーションと情意要因：「言語使用不安」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」についての考察」『関西大学外国語教育研究』第5号 pp.81-93.
- 吉村紀子・中山峰治 (2010) 『海外短期英語研修と第2言語習得』ひつじ書房。
- 渡邊賢二・堤貴之 (2017) 「大学新入生の友人関係の変化と適応感との関連：短期縦断調査より」『皇學館大学紀要』55巻 pp. 106-122.
- Covington, M. V., & Dray, E. (2002). The developmental course of achievement motivation: A need-based approach. In A. Wigfield & J.S. Eccles (Eds.), *The development of achievement motivation* (pp.33-56). San Diego CA: Academic Press.
- Pomerantz, E.M., Cheung, G.S., & Qin, L. (2012). Relatedness between children and parents: Implication for motivation. In R.M. Ryan (Eds.), *The Oxford handbook of human motivation*. (pp.335-361). NY: Oxford University Press.

Abstract

This study investigates how current attitudes toward English differ depending on the learning environments of English learners. The learning environments were categorized into those at home, those in school, and human relationships. In addition, which environments would increase motivation for learning English was investigated.

A questionnaire was completed by a total of 84 students ranging from 1st graders to 4th graders at Tokyo Women's Christian University. The questionnaire included items regarding basic information of the respondents, current attitudes toward English (i.e., affective learning factors), home environments, school environments, and human relationships.

Results showed each learning environment influences affective factors in different manners. In addition, it was revealed that the human environments affected the current attitudes toward English the most. As for the home environments, it is important for the family to be interested in the learner's desire to learn English because such interest would lead to the improvement of the learner's English proficiency and improve the learner's confidence. Results on the school environments showed that the English learners believe that the more one's English proficiency develops, the higher their social status becomes. Therefore, teachers can motivate learners by letting them imagine how they may use English in the future. Finally, as for human environment factors, the learners were found to be greatly influenced by their same-generation influential friends. Therefore, it is important for them to have social interaction with various friends.

To sum up, it can be concluded that different learning environments have different relationships with affective learning factors. Future research that investigates the most suitable English-language education in schools which takes home environment factors into careful consideration would be beneficial.